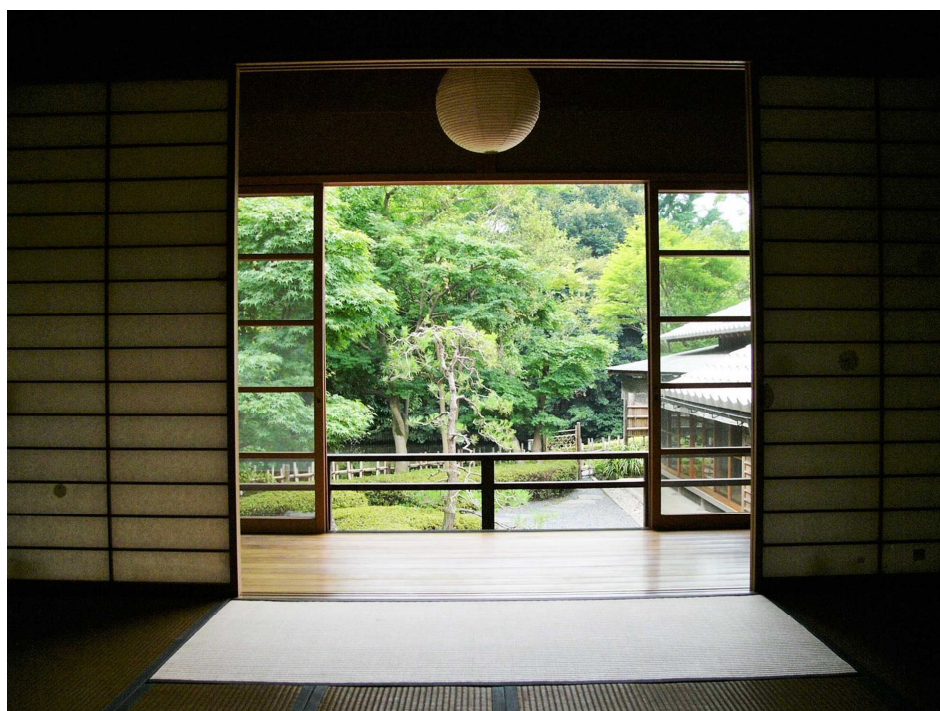


名園で俳句を
熊谷市名勝「星溪園」俳句講座

俳諧・俳句史 解説資料

筑波の道より俳句まで



熊谷市教育委員会
熊谷市俳句連盟

筑波の道より俳句まで

創世神話 — 古事記

「あなにやし愛男を」
「あなにやし愛女を」

筑波の道

十二代景行天皇の時、日本武尊が老人に「新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる」と問い、老人が「日日並べて夜には九夜、日には十日を」と答え、連歌の始まりとされることから連歌の異称。

万葉集

十六代仁徳天皇より四七代淳仁天皇まで、約三世紀半の歌を収めた日本最初の歌集。四千五百首余の長歌、短歌、施頭歌など。あらゆる階層の生きた声を集める。大伴家持他の撰。

古今和歌集

六十代醍醐天皇の勅により、万葉以後の秀歌を集めた。勅撰第一号の歌集。約千百首

敷島の道

和歌の道。歌道の意。「敷島」は磯城島で大和国磯城郡の地名。十代崇神、二十九代欽明天皇が都し、日本国、やまとの国の意も。

連歌

室町時代隆盛を極めた。平安時代は短連歌。室町時代は百韻を主に長連歌。

八代集

平安初期から鎌倉初期までの勅撰和歌集の総称。

古今和歌集
後撰和歌集
拾遺和歌集
後拾遺和歌集
金葉和歌集
詞花和歌集
千載和歌集
新古今和歌集

を編集。延喜十四年(九一四)頃成立。紀貫之他の撰。優美繊細、知的技巧的。

新古今和歌集

建仁元年(一一二〇)、後鳥羽上皇の院宣により第八番目の勅撰集として作られた。撰者は藤原定家、家隆、僧寂蓮他。約一九八〇首収める。形式的、技巧を駆使、優艶華麗。

菟玖波集

筑波集、古筑波。南朝九七代後村上天皇の文和五年(一二五六)の序があり、準勅撰集。二条良基が編集。救済が援助、幕府の佐々木導誉が推進。連歌を文学とし、短連歌、長連歌、俳諧などあらゆる句形を収め、連歌発展の基礎を作った。

新撰菟玖波集

新筑波。準勅撰連歌集。明応三年(一四九四)、大内左京大夫政弘の発案で、一条冬良、宗祇などで編集。翌年九月二六日、百三代後土御門天皇奏覧。作者二四一人。付句一八〇二句。発句二五一句。菟玖波集と並んで連歌集の双璧。

収載四六〇人。救済、尊胤、良基、導誉、尊氏、為家、善阿の順に多い。

俳諧

語義は「おどけ、たわむれ」。万葉集の戯歌、古今集の俳諧歌の伝統を受けて、俳諧の連歌となる。

新撰犬筑波集

犬筑波集、俳諧連歌、俳諧連歌抄。山崎宗鑑編俳諧撰集。天文八年に成る。付句と発句からなり、多くの作者を集める。庶民的、素朴な句が多い。談林の作家に影響。

守武千句

俳諧之連歌独吟千句。飛梅千句。天文五年着手。九年頃完成。跋に「本連歌に露かほるへからす」

貞門

松永貞徳「天亀二年（一五七二）生。承応二年（一六五三）没。」を中心の一派と俳風。古典趣味、格式的。守武の風を受け、俳言を用い、滑稽を重んじ、連歌に近づけようとした。門下に季吟など。

談林

西山宗因「慶長十年（一六〇五）生。天和二年（一六八二）没。」を祖とする一派。仏教の学問所の「談議の林」を略。延宝、天和時代（一六七三〜一六八一）に京、大阪、江戸に

山崎宗鑑

天文二二年（一五五三）没が通説。

守武と共に俳諧の祖。何を詠つても良く、自由奔放な笑が多い。

荒木田守武

文明五年（一四七三）生。天文十八年（一五四九）没。

父は内宮の祢宜、母は内宮長官の女。三歳で従五位下。

六九歳一祢宜、菌田長官と呼ばれる。

大永二年の「世中百首」は、伊勢論語といわれる。

俳言（はいごん）
俗言、すなわち
和歌。連歌に用
いない言葉。俗
語。漢語。流行
語など。

流行。機智を働かせ自由な町人を詠った。芭蕉の第一作、「貝おほひ」にも影響。

正風（蕉風）

同義とされるが、元来、「正風」は純正な流派の意である。許六の書により同義とされるようになったが、芭蕉百回忌の寛政五年（一七九三年）、二条家から「正風宗師」の号が与えられ、神格化されるまでになった。

貞門、談林の流れを受け、「道」ともいうべき高さを求め、独自の俳諧を樹立した。蕉風の根本は中世的「さび」である。

寛文十二年（一六七二）、伊賀の三六名の発句、六十句の句合に判詞を添え「貝おほひ」と題して天神社に奉納、江戸へ出て刊行。これが七部集の第一となった。談林の傾向が見られる。

蕪村

谷口氏のち与謝氏。家系不明。享保元年（一七一六）生。十七歳の頃、江戸へ下り画俳を志す。二七歳、俳句の師が没し、約十年間、関東、東北を遍歴。京へ戻って名を上げた。郷愁詩人とも呼ばれ、清新高雅。明るく唯美的な作風。天明三年（一七八三）没。金福寺の芭蕉碑の隣に埋葬。

松尾芭蕉

正保元年（一六四四）
生。元禄七年（一六九四）
没。

父は与左衛門、士分待遇の無足人。

母は桃（百）地氏。

寛文四年（一六六四）、
宗房の二句が撰集に。

寛文六年、主君蟬吟
没。

位牌を高野山に納める。

芭蕉崇拜

「其雪影」に序し、芭蕉、其角他の像を画く。

金福寺に芭蕉庵再興。

「洛東芭蕉庵再興記」

「奥の細道図」屏風、

「芭蕉翁像」義仲寺、

幻住庵訪。

一茶

宝暦十三年（一七六三）生。文政十年（一八二七）没。父、小林弥五兵衛は農と駄馬を業とす。継母と折合い悪く十四歳で江戸へ。

天明七年（一七八七）、二六庵竹阿に入門。二五歳。

安政二年（一七九〇）、師が没し、二六庵を継ぐ。

寛政四年（一七九二）、京阪、四国、九州へ行脚し、俳諧寺入道一茶坊を名乗った。

文化十一年（一八一三）、帰郷。宗匠として安定した地位を得る。

五二歳で初婚。子は死に妻に先立たれる。再婚すれど離婚。火災に遭い、土蔵の中で再発した中風で死す。

俳風は強者に反抗、弱者に同情。農民的で平明素朴に表現。異色の存在であった。

「俳句」の語源

寛文三年（一六六三）、服部定清が「尾蠅集」で初めて使う。以来、俳書に散見。

子規は明治二二年はじめて使う。二六年「発句は文学なり。連俳は文学に非ず」と、発句を独立させたものを「俳句」と呼ぶとした。

現代は江戸時代を「俳諧」、明治以降を「俳句」と呼ぶのが標準。

服部定清
通稱、喜三郎、京都生。
貞徳門のち立圃に就く。

正岡子規

慶応三年（一八六七）生。明治三五年没。

伊豫松山生。本名常規。幼名処之助、また升。号は丈鬼、西子、獺祭書屋主人、越智処之助、竹の里人等。

父は松山藩御馬廻加番。六歳で死別。寺小屋に通い、伯父に習字。十二歳で漢詩を作る。

明治十六年松山中学校を四年生で中退、叔父の計らいで東京遊学。須田学舎に入り、

藤野古白と同宿。のち共立学校入学。陸羯南も紹介される。

十七年旧藩主久松家の給費生となり、東京大学予備門入学。漱石を知る。

十八年句作を開始。

二十年帰郷のさい其戎を訪ね、「わが俳諧の師」と述べ、其戎の俳誌に毎号投句、添削を受く。

二二年師の没したあとは師を求めず、古俳句を分類。嗜血して子規と号す。

二三年東大入学。碧梧桐の句を添削。

二四年暮、新しい俳句に開眼。古俳句と俳人の非風、飄亭、古白らの影響。虚子を知る。小説「月の都」を書くが、露伴に認められず、以後、俳句に専念。

二五年、落第して中退。日本新聞入社。母と妹を迎えた。「日本」に「獺祭書屋俳話」

連載。それは宗匠俳諧の攻撃と芭蕉・蕪村の見直しという俳句革新の第一声。新派興隆の基となる。

御馬廻

主君の馬廻り警護役。加番はその予備・副の意。

陸羯南

陸奥国生。宮城師範、司法省法律学校に学ぶ。官報局二一年奉職。のち「日本」主宰。子規に腕を振寄せた。

大原其戎

松山藩の小姓。御船手大船頭などの要職を辞し、梅室門、二条台閣から免許。四時庵と稱。

五百木飄亭

松山医専入学一年後、東京遊学。子規と作句。二八年「日本」入社。三四年編集長。昭和四年「日本乃日本人」主宰。

小日本

明治二七年二月創刊。七月廃刊。「日本」が発行停止の時の代用。不折が挿絵を担当。

中村不折
洋画家、書家。東京生。渡仏してローランズに師事。子規に写生の眼を開かせた。

二八年日清戦争へ記者として従軍、帰国船中で咯血。神戸病院で一時重態。帰京後、虚子に後事を託すが断られる。

三十年「俳人蕪村」を書き、客観写生を発見。松山で極堂が「ほととぎす」発行。

三十一年「ほととぎす」を東京に移し虚子に託す。虚子は「ホトトギス」として発行。最初の選集「新俳句」刊行。また随筆を連載、歌俳の評論を怠らず。

三四年第二の選集「春夏秋冬」は春の選のみで、あとは虚碧の二人にまかせた。

三五年いよいよ病苦に耐えず、「日本」の俳句選を格堂と共選にする。九月十八日絶筆三句。十九日午前一時没。戒名は子規居士。田端大竜寺に二二日葬。

高浜虚子

明治七年二月二十二日、愛媛県松山市長町生まれ池内家の5人兄弟の末子に生まれるが祖母方の高濱姓を継いだ。池内家は能楽の家として知られる。

智環小学校、愛媛県第一中学、松山高等小学校、愛媛県伊予尋常中学と変遷し河東碧梧桐と出会う。

明治三十年柳原極堂は虚子らとともに「ほととぎす」を創刊。虚子は「国民新聞」俳壇の選者でもあった。

明治三十年六月大畠いと結婚。日暮里に移り住んで明治三十一年十月、新生「ホトトギス」の第二巻第一号としてそれを継承した。

柳原極堂

伊豫生。本名正之。上京の子規と句作。「鶏頭」創刊。

子規堂建立。名誉市民、名誉県民。

赤木格堂

岡山生。本名亀一。三年入門。俳句・和歌に専心。衣鉢を継ぐ一人と目さる。師没後は引退。

明治三十五年九月の子規の死去を境に碧梧桐との間に、対立の構図があらわれはじめる。そして碧梧桐の「温泉一〇〇句」を、虚子が批判したことによる碧梧桐の実景主義と虚子の古典的情感主義とのせめぎあいのはじまる。このころより虚子は写生文に惹かれ各種文章を「ホトトギス」に掲載し、夏目漱石の「吾輩は猫である」を明治三十八年より連載することとなる。

明治四十年になると小説「風流讖法」「斑鳩物語」などを次々と発表した。

それに遡る明治四十五年に雑詠欄を復活させ俳句雑誌としての復活を目指し、徐々に発行部数も取り戻しつつ「俳句とはどんなものか」「俳句の作りやう」「進むべき俳句の道」などの著作を中心として作家を育成し、渡辺水巴、村上鬼城、飯田蛇忽、原石鼎、前田普羅などの俳人を世に送り出すことになる。

昭和三年に「花鳥諷詠」の説を明らかにする。その後、水原秋桜子、阿波野青畝、山口誓子、高野素十らの、4Sらを排出するが昭和六年、秋桜子が素十を中心とするその俳句観の相違により、「ホトトギス」を脱会し「馬酔木」を主宰するという事態になる。昭和十年代において虚子は花鳥諷詠、客観写生こそが俳句の神髄であるとして、それを伝統俳句の王道として隆盛をきわめる。

昭和十九年にもなると戦時色も濃くなり虚子は長野県小諸市に疎開し「小諸百句」、また小説の「虹」三部作をその時に執筆、昭和二十二年には発表する。

虚子はその後、鎌倉をその活動の中心として近代以降の俳句界の巨星として活躍し、昭和二十九年には俳人としては史上初の文化勲章を授与

昭和三十四年四月八日自宅にて死去。享年八十五歳。

句会いろいろ

句会 子規の頃の形式が継がれている。各自選が従来にない特色。

句合わせ 句を左右にして競う。

袋句会 各自の封筒の表に題を書き、句を入れて次々廻す。

闇汁句会 人に知れぬよう材料を持ち寄り、闇の中で鍋に入れ、箸で取ったものは必ず食す遊び。

川柳

前句付は享保以後(二七二六)大衆化。宝暦(一七五二)の頃は前句をはぶき、一句立が流行。柄井川柳は宝暦七年(一七五七)、四十歳の時「万句合」を出版。選評が川柳点といわれ人気を集め、一回の応募が万句を越えた。

明和二年(一七六五)、「句意のわかりやすき」佳句を集め、「誹風柳多留」を出版。川柳が誕生。江戸特有の滑稽、うがち、奇抜な表現を誇り、自然より人事が適す。

明治三二年、虚子家の闇汁会。

会者四方太、露月、子規、飄亭、虚子、鳴雪、牛伴、青々、碧梧桐、鼠骨、繞石。

柄井川柳

享保三年(一七一八)生。寛政二年(一七九〇)没。三八歳で浅草の名主。

俳句 A・B・C

A. 定型について

1. 俳諧連歌の発句が独立したのだから。
2. 日本語の構造上適切で、自然的、合理的。
3. 五七五の面白さを受容し、楽しみ、利用する。

B. 切れ字について

1. 「や」「かな」「けり」を入れると俳句らしくなる。
「かな」「けり」は下五。「や」は上五か中七へ付く。
2. 切れ字はいくつもある。名詞などでも切れる。
3. 純粹の文語形式から口語体を入れる流れ。言葉は生きもの。文法は後から。口語体の長たらしき、強さ、明快感の不足を補う切れ字。

C. 季語(季題)について

1. 俳諧連歌以来の約束だから。
時候、天文、地理、人事、動物、植物。
2. 作者と読者の理解のキイ。連想性や季感効果など。
3. 季語はひとつで良い。主題や感動の中心が呆けるから。

切れ字意識

中世から切れ字は十八とか二二字とか言われて来た。
芭蕉は「切れ字に用ふる時は、四十八字皆切れ字也。」という。
切れ字意識を持って使えという事。

俳句鑑賞

句会での一句

白波の斜面うずめて蕎麦の花

風たちぬ置きわすれたる蚊やり台

少年の見果てぬ夢や夏の雲

秋日傘地を這う影がついてくる

流灯の触れて離れて灯の揺れる

秋暑し人の匂いの光堂

幸不幸織りなし姿の走馬灯

黙禱のしじまを乱す蝉しぐれ

稲の花水ゆたかなる用水路

猫じゃらし刈られて消えし風の色

草は穂に捨て田のごとき休耕地

手を振れば日傘まわして応えけり

なぜか空見たくなる日よ窓の秋

落日の海見ていたり終戦日

祭り笛からだに乘せて吹きにけり

縄文の貌で現るごきかぶり

幣振ればこども神輿のかしこまる

手花火の光集むる子の笑顔

七代の当主が土間に水を打つ

ごきぶりもこの朝空をみているか

名園で俳句を
熊谷市名勝「星溪園」俳句講座
俳諧・俳句史 解説資料 筑波の道より俳句まで

著者：金子兜太（現代俳句協会・俳誌「海程」・熊谷市俳句連盟顧問）
天貝 弘（熊谷市俳句連盟）
山下祐樹（熊谷市教育委員会・熊谷市立江南文化財センター）

2016年9月1日発行（2020年9月15日改訂）
発行：熊谷市教育委員会 熊谷市俳句連盟
事務局：埼玉県熊谷市立江南文化財センター（埼玉県熊谷市千代329）